
『D H』

天山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『DH』

【Nコード】

N1621T

【作者名】

天山

【あらすじ】

クリスマスになると、厄介なことに巻き込まれる男。今度は、ト
ーキョーか・・・。

『 D H 』 シリーズ 第5作（前書き）

この章は、飛ばしてください。
第二部からお読みください。

『 D H 』 シリーズ 第5作

ユナイテッド625便

通路側に座っているサラリーマン風の男が、しきりに、窓の外を気にしている。

窓側に座っている無精ひげの男は、隣の男の視線が、気になって仕方がない。

「落ち着かないのかい？」

「いや、ええ、まあ、少しだけ。」

「なんせ、床の下は、空気だからね。」

通路側の男を、高所恐怖症だと推察し、わざわざ、恐怖心をあおるようなことを言う。

そんなことを聞かされた男は、着ている上着の袖で、冷や汗をぬぐう。

「俺も、高いところは、苦手だが、もう、何度も無理やり乗せられているからな。」と、

同情を持ちかけるようなことを言う。

「ああそうだ、無事に着陸できたら、地に足を着け、ソックスを脱いで、裸足になるんだ。」

そして、足の指先を丸めて、地面を掴むようにやってごらん。」

「何かのおまじないですか？」

「ああ、俺の経験だがね。とても、落ち着くんだ。」

「そりゃあいい、やってみよう。ありがたい。」

「どうってことないさ。俺も昔、教えてもらったのさ。」

「DH」シリーズ 第5作（後書き）

感想自由

第2部

東京・羽田空港 快晴 午後6時15分

コナイテッドは、若干の遅れが見られたものの無事到着した。

「Mr. John McLean」ネームカードを持った、スーツ姿の若い女性。

年の瀬ともなれば、上着の衿を立てている乗客が多い。

入国ゲートを通った旅客達は、視線を拡散し、自分の進行方向を探っている。

行く先を確認した旅客は、それぞれの方向を指差し、歩みを急ぐ。そこに、雑踏の中から、にやけたオヤジが、向かってくる。

「新手的ナンパかい？お嬢さん。」

「ミスター、マクレーン？」

「そうだよ。Miss?・・・。」

「ウェルカム、トーキョー。わたくし、ヒロコ・ナカトミです。」

「ミス・ヒロコ。夕日に染まるフジマウンテンは、君のようにセクシーだね！感動したよ。」

「ウフ。リムジンを用意してあります。こちらへどうぞ。日本は、初めてですか？」

「ああ、NY市警を引退するまで、そんな時間も金も無かったからね。」

「ロスでは、祖父が、たいへんお世話になりました。」

「ああ、あの時は、MAJIEで、死ぬかと思っただよ。」

「MAJIEですか？フフ。」

「少しだけ、日本語を知ってるよ。」

「MAJIEは、若い子が、よく使いますよ。私たちの、招待を受けてくださって、マジ感謝しております。」

「そうだね。ありがと。平和な日本を楽しむつもりだよ。」

「日本のすばらしいバケーションを、どうぞ、観光してください。
私が、案内いたしますので。」

第3部

東京・品川 「ナカトミ・プラザ・ホテル」

東京湾を臨む30階建ての高級ホテルのスイートルーム。

「9時でよろしければ、私の父が、お食事を一緒にと、いかがですか？」

「OK。そうしよう。まずは、シャワーで、汗を流したいね。」

「お酒は、こちらに……。フロントは、この電話機で、繋がります。」

それと、専用の携帯電話をご用意しておきました。国際電話も利用できますよ。

私に用件が、あるときは、画面の……。ここで、繋がりますよ。」

「携帯？オー、サンキュー。皆さんの歓迎に感謝しているよ。」

「お疲れになったでしょう……。」

「ミス・ヒロコ。ところで、これは？監視カメラかい？」

「ええ、これは、最新の防犯システムで、画像のカメラとは、違うわ。」

このモニターに今のお部屋の状況が、映っていますよ。

お客様の映像は、プライバシー保護のため全く映りません。

一方、お客様以外の映像を反映されるように設計してあります。

ご覧の通り、私だけ、映っていますよ。」

「ワオ。日本のテクノロジーは、グレートだね。」

「あと、この携帯で、モニターできるようになってるんですよ。」

「ああ、至れりつくせりだね。」

ひとりになって、くつろぐマクレーン。

防犯モニターシステムの前で、いろいろな動きを試みるマクレーン。

ン。

「なるほど、誰も見てないなら・・・。」

ソックスを脱いで、さっそく、指を丸くして、床の感触を確かめる。

第4部

おもちゃの拳銃を持った、子供が、廊下を駆け抜ける。

ぶつかりそうになり、すれ違いざまに、両手を挙げるマクレーン。食事会を目前にして、服装を汚されなくなかったのだ。

身なりは、こザツぱりしたジャケットに、濃紺のスラックスと、至ってカジュアルだ。

「マクレーン様、どうぞ、奥のVIPルームへ。・・・ご案内いたします。」

豪華な内装に、「サプライズだね。」と、目を丸くするマクレーン。

「サプライズは、これからですよ・・・。」

コンシエルジェの意味ありげな、一言に、視線を泳がせるマクレーン。

コンシエルジェが、大きな二枚扉を開く。

ナカトミ一族と、経営陣が、30人ぐらいだろうか・・・。

待ちかねていたように、それぞれが、立ち上がる。そして、輪を描くように並び始める。

アメリカでは、見かけない光景だと思った。

「私の家族を紹介しましょう。」一人ひとり、紹介し始める、ヒロコ。

握手だけでなく、日本式に、お辞儀するマクレーン。

まったくと言っていいほど、聞いたことの無い日本人の名前を聞かされ、

「YOROSIKU、ONEGAISIMASU。ワタシハ、ジョン・マクレーンです。」と、愛想よく応える。

「オー、日本語、お上手ですね。」と、言われたようだが、もとより、全く日本語を理解できなかった。

この中で、英語で、会話できたのは、何人かの役員と、ヒロコと、ディブ・スペクターと、取締役になったという元妻のホリー・マクレーンであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1621t/>

『DH』

2011年10月8日23時25分発行